「新精選古典文法 三訂版」　内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

**東京書籍「新精選古典文法　三訂版」―「新編古典探究」関連表**

※「新精選古典文法　三訂版」の例文（練習問題を含む）のうち、「新編古典探究701」から採録した例文の一覧。　教科書の単元順に、「新精選古典文法　三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。





**Ⅰ部**

**1　説話に親しむ**

**十訓抄**

［大江山の歌］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P155 | 「こはいかに。かかるやうやはある。」 | P13L2 |

**２　随筆を読む**

**徒然草**

［丹波に出雲といふ所あり］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P113 | 「いざ給へ、出雲拝みに。」 | P20L3 |
| P128 | 「ちと承らばや。」 | P21L6 |
| P149 | 「深きゆゑあらん。」 | P20L8 |
| P156 | 「ちと承らばや。」 | P21L6 |
| P158 | 定めて習ひあることに侍ら（　）。 | P21L5 |
| P158 | 「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。」 | P20L8 |
| P185 | 「いざ給へ、出雲拝みに。」 | P20L3 |
| P185 | すゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。 | P31L7 |

［九月二十日のころ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P21 | あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。 | P23L1 |
| P34 | かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。 | P23L2 |
| P56 | やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。 | P23L1 |
| P90 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P23L4 |
| P112 | ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、 | P22L1 |
| P148 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P23L4 |
| P148 | 明くるまで月見歩くこと侍りしに、 | P22L2 |
| P149 | 案内せさせて入り給ひぬ。 | P22L4 |
| P150 | やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。 | P23L1 |
| P160 | その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。 | P23L4 |

［花は盛りに］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P32 | たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。 | P24L2 |
| P43 | 「この枝、かの枝散りにけり。」 | P24L7 |
| P60 | 殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。 | P24L7 |
| P87 | よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。 | P24L9 |
| P88 | 月は隈なきをのみ見るものかは。 | P24L1 |
| P99 | 心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。 | P25L5 |
| P148 | 咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。 | P24L2 |
| P156 | 花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。 | P24L1 |
| P156 | 歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、 | P24L3 |
| P157 | 「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」 | P24L7 |
| P168 | 「この枝、かの枝散りにけり。」 | P24L7 |

**方丈記**

［ゆく河の流れ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P18 | 朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。 | P29L9 |
| P18 | 知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P30L1 |
| P19 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P29L3 |
| P29 | 所も変はらず、人も多かれど、 | P29L7 |
| P29 | 消えずといへども夕べを待つことなし。 | P30L5 |
| P72 | いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。 | P29L8 |
| P76 | あるいは大家滅びて小家となる。 | P29L7 |
| P76 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P29L3 |
| P83 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P29L1 |
| P110 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P29L1 |
| P136 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P29L3 |
| P137 | 消えずといへども夕べを待つことなし。 | P30L5 |
| P137 | 露落ちて花残れり。 | P30L4 |
| P138 | 知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P30L1 |
| P146 | たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、貴き、賤しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。 | P29L4  ～P30L2 |
| P146 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P29L1 |
| P146 | あるいは露落ちて花残れり。 | P30L4 |
| P149 | 何によりてか目を喜ばしむる。 | P30L3 |
| P162 | 二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。 | P29L8 |
| P164 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P29L1 |
| P166 | あるいは大家滅びて小家となる。 | P29L7 |

**３　作り物語を読む**

**竹取物語**

［なよたけのかぐや姫］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P6 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P32L1 |
| P78 | 「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P32L5 |
| P83 | 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。 | P32L1 |
| P86 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P32L2 |
| P90 | もと光る竹なむ一筋ありける。 | P32L3 |
| P93 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P32L2 |
| P96 | 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 | P32L4 |
| P114 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。 | P32L1 |
| P120 | 「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P32L5 |
| P151 | 寄りて見るに、筒の中光りたり。 | P32L3 |
| P157 | あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。 | P32L3 |
| P159 | 「子になり給ふべき人なめり。」 | P32L5 |
| P168 | 「竹の中におはするにて、知りぬ。」 | P32L5 |

［天の羽衣］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P70 | 天の羽衣入れり。 | P32L12 |
| P121 | 「もの知らぬこと、なのたまひそ。」 | P34L11 |
| P121 | 翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。 | P35L8 |
| P122 | 「きたなき所の物聞こし召したれば、」 | P33L13 |
| P124 | 一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」 | P33L13 |
| P125 | いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。 | P34L12 |
| P135 | 一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」 | P33L13 |
| P135 | いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。 | P34L12 |
| P155 | 今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける | P35L6 |
| P156 | 「もの知らぬこと、なのたまひそ。」 | P34L11 |

［富士の山］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P24 | あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ | P36L11 |
| P37 | 駿河国にあなる山の頂に、持てつくべきよし仰せ給ふ。 | P36L9 |
| P54 | 御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。 | P37L1 |
| P88 | 「いづれの山か天に近き。」 | P36L8 |
| P114 | 広げて御覧じて、いとあはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず。御遊びなどもなかりけり。 | P36L5 |
| P115 | 「駿河国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」 | P36L9 |
| P117 | 大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き。」と問はせ給ふに、 | P36L8 |
| P117 | 中将、人々引き具して帰り参りて、 | P36L4 |
| P126 | 薬の壺に、御文添へて参らす。 | P36L5 |
| P127 | かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。 | P36L4 |
| P146 | あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ | P36L11 |
| P150 | 峰にてすべきやう教へさせ給ふ。 | P37L1 |
| P154 | その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。 | P37L4 |
| P155 | 死なぬ薬も何にかはせむ | P36L11 |
| P159 | 薬の壺に、御文添へて（　）。 | P36L5 |

**４　和歌の世界**

**『小倉百人一首』より**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P38 | 山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり　［出典は古今和歌集］ | P48L8 |
| P52 | ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ | P48L3 |
| P108 | 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　［出典は古今和歌集］ | P48L5 |

**５　日記を読む**

**土佐日記**

［馬のはなむけ］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P24 | 船路なれど馬のはなむけす。 | P54L9 |
| P95 | 年ごろよく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜更けぬ。 | P54L6 |
| P150 | 住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。 | P54L5 |
| P151 | 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。 | P54L1 |
| P154 | 潮海のほとりにてあざれ合へり。 | P55L1 |

［帰京］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P50 | いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。 | P56L6 |
| P73 | 見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや | P57L4 |
| P87 | 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、 | P56L3 |
| P148 | とまれかうまれ、疾く破りてむ。 | P57L5 |
| P149 | 声高にものも言はせず。 | P56L5 |
| P158 | 「あはれ。」とぞ人々言ふ。 | P56L9 |
| P165 | 今宵、「かかること。」と、声高にものも言はせず。 | P56L5 |
| P185 | なほ飽かずやあらむ、またかくなむ。 | P57L3 |
| P187 | とまれかうまれ、疾く破りてむ。 | P57L5 |

**更級日記**

［門出］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P46 | 額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。 | P59L5 |
| P61 | 「京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」 | P58L8 |
| P117 | 「物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」 | P58L9 |
| P125 | 薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、 | P59L5 |
| P127 | 身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、 | P58L9 |
| P135 | 薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、 | P59L5 |
| P157 | あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。 | P58L1  ～L7 |
| P157 | 日の入り際の、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。 | P59L4  ～L6 |

［物語］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P64 | 紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。 | P60L2 |
| P77 | これを見るよりほかのことなければ、 | P61L6 |
| P82 | 母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。 | P60L1 |
| P93 | 引き出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ。 | P61L4 |
| P97 | 「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、 | P60L9 |
| P100 | 我はこのごろわろきぞかし、 | P61L10 |
| P115 | 「何をか奉らむ。」 | P60L10 |
| P146 | 夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と言ふと見れど、 | P61L8 |
| P167 | かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、 | P61L11 |

**６　軍記物語を味わう**

**平家物語**

［壇の浦の戦い］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P149 | 「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。」 | P68L10 |

**Ⅱ部**

**１　随筆を味わう**

**枕草子**

［九月ばかり］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P36 | 軒の上などはかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、 | P87L3 |
| P82 | 人も手触れぬに、ふと上ざまへ上がりたるも、いみじうをかし。 | P88L1 |
| P154 | 露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上ざまへ上がりたるも、いみじうをかし。 | P88L1 |
| P168 | 人も手触れぬに、ふと上ざまへ上がりたるも、いみじうをかし。 | P88L1 |

［中納言参り給ひて］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P43 | 「これは隆家が言にしてむ。」とて、笑ひ給ふ。 | P89L7 |
| P69 | 「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」 | P89L6 |
| P73 | 「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」 | P89L6 |
| P158 | おぼろけの紙はえ張る（　）ば、 | P89L2 |
| P158 | 「一つな落とし（　）。」 | P89L9 |
| P185 | 「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。 | P89L9 |

［雪のいと高う降りたるを］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P48 | 御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。 | P90L3 |
| P101 | 「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」 | P90L2 |
| P125 | 例ならず御格子参りて、 | P90L1 |
| P161 | 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。 | P90L1～L6  (全文) |
| P170 | 「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」 | P90L2 |
| P187 | 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、 | P90L1 |

**２　歌物語を楽しむ**

**伊勢物語**

［初冠］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P43 | その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。 | P94L3 |
| P155 | ついでおもしろきことともや思ひ（　）。 | P95L2 |
| P157 | 春日の里に領るよしして、狩りにいにけり。 | P94L1 |
| P164 | 昔、男、初冠して、 | P94L1 |

［東下り］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P21 | 富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。 | P98L1 |
| P42 | 三河国八橋といふ所に至りぬ。 | P96L7 |
| P44 | 道知れる人もなくて惑ひ行きけり。 | P96L6 |
| P45 | 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。 | P98L10 |
| P73 | 白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、 | P98L9 |
| P74 | その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。 | P96L10 |
| P74 | 「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」 | P98L7 |
| P74 | 東の方に住むべき国求めにとて行きけり。 | P96L4 |
| P78 | もとより友とする人、一人、二人して行きけり。 | P96L6 |
| P86 | 橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。 | P96L8 |
| P91 | 渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、 | P98L11 |
| P93 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P98L6 |
| P97 | 京に思ふ人なきにしもあらず。 | P98L9 |
| P100 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P98L6 |
| P143 | 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ | P97L1 |
| P149 | 東の方に住むべき国求めにとて行きけり。 | P96L4 |
| P154 | 武蔵国と下総国との中に、いと大きなる川あり。 | P98L5 |
| P149 | なりは塩尻のやうになむありける。 | P98L4 |
| P156 | 限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、 | P98L6 |
| P158 | 名にし負はばいざ言問はむ都鳥 | P98L13 |
| P159 | 「かかる道は、いかでかいまする。」 | P97L9 |
| P165 | その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。 | P96L10 |
| P167 | 橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。 | P96L8 |
| P169 | 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。 | P98L10 |
| P169 | 三河国八橋といふ所に至りぬ。 | P96L7 |
| P171 | 道知れる人もなくて惑ひ行きけり。 | P96L6 |

［渚の院］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P24 | 十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭の詠める、 | P101L9 |
| P29 | 山の端なくは月も入らじを | P101L13 |
| P84 | 狩りはねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。 | P100L8 |
| P96 | 夜更くるまで酒飲み、物語して、 | P101L8 |
| P114 | 昔、惟喬親王と申す親王おはしましけり。 | P100L1 |
| P120 | 年ごとの桜の花盛りには、その宮へなむおはしましける。 | P100L4 |
| P138 | 馬頭なりける人の詠める、 | P100L12 |
| P150 | おしなべて峰も平らになりななむ山の端なくは月も入らじを | P101L13 |
| P156 | 酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。 | P100L8 |

**３　歴史物語を読む**

**大鏡**

［道真の左遷］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P159 | 御前の梅の花を（　）て、 | P109L9 |
| P187 | さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出で来て、 | P108L9 |

［三船の才］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P121 | 入道殿、「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」とのたまはすれば、 | P110L6 |
| P149 | 入道殿の大井川に逍遥せさせ給ひしに、 | P110L1 |

［道長、伊周の競射］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P80 | 「摂政、関白すべきものならば、この矢当たれ。」 | P113L6 |
| P88 | 中心には当たるものかは。 | P113L1 |
| P98 | 「何か射る。な射そ、な射そ。」 | P113L11 |
| P124 | 帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、 | P112L5 |
| P147 | 延べさせ給ひけるを、やすからず思しなりて、 | P112L9 |
| P160 | 帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと、中関白殿思しおどろきて、いみじう饗応し申させ給うて、下﨟におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。 | P112L1～L8 |

**４　歌話・歌論を読む**

**古今和歌集仮名序**

［やまと歌は］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P45 | 生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。 | P123L4 |
| P76 | 生きとし生けるもの、 | P123L4 |
| P88 | 生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。 | P123L4 |
| P90 | いづれか歌を詠まざりける。 | P123L4 |

**５　作り物語を味わう**

**源氏物語**

［光源氏の誕生］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P29 | 取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、 | P127L14 |
| P30 | 同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。 | P126L4 |
| P32 | いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、 | P126L7 |
| P43 | 楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、 | P127L5 |
| P72 | いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。 | P126L1 |
| P77 | 同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。 | P126L4 |
| P82 | 急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御かたちなり。 | P128L3 |
| P95 | 世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。 | P128L2 |
| P96 | 朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、 | P126L5 |
| P97 | 取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、 | P127L14 |
| P127 | 疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、 | P128L5 |
| P129 | いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P126L1 |
| P135 | いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P126L1 |
| P139 | 前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。 | P128L2 |
| P160 | いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P126L1 |
| P162 | いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。 | P126L1 |
| P163 | 取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、 | P127L14 |
| P185 | いつしかと心もとながらせ給ひて、 | P128L3 |

［若紫］

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **文法書** | **例文** | **教科書** |
| P34 | 「いで、あな幼や。」 | P132L1 |
| P34 | 「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」 | P132L10 |
| P60 | 簾少し上げて、花奉るめり。 | P129L13 |
| P69 | 少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。 | P130L11 |
| P72 | 「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」 | P130L11 |
| P75 | 「いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。」 | P130L14 |
| P76 | 「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」 | P130L10 |
| P81 | 「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」 | P132L10 |
| P82 | 「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」 | P132L3 |
| P83 | 簾少し上げて、花奉るめり。 | P129L13 |
| P85 | 「伏籠のうちに籠めたりつるものを。」 | P130L12 |
| P87 | 烏などもこそ見つくれ | P131L1 |
| P88 | 「童べと腹立ち給へるか。」 | P130L10 |
| P97 | 「今日しも端におはしましけるかな。」 | P133L10 |
| P98 | かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、 | P134L7 |
| P117 | かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。 | P129L11 |
| P127 | 「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、 | P132L3 |
| P130 | 「源氏の中将の、瘧病まじなひにものし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」 | P133L10 |
| P131 | 「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。」 | P133L14 |
| P135 | 「源氏の中将の、瘧病まじなひにものし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」 | P133L10 |
| P137 | 清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。 | P130L5 |
| P139 | ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。 | P132L6 |
| P154 | 「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」 | P130L11 |
| P154 | かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。 | P129L11 |
| P154 | いと口惜しと思へり。 | P130L12 |
| P155 | 「いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、 | P133L13 |
| P156 | あはれなる人を見つるかな、 | P134L4 |
| P158 | 「いで、あな幼や。」 | P132L1 |
| P162 | 「雀の子を犬君が逃がしつる。」 | P130L11 |
| P166 | 少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。 | P130L11 |
| P169 | 明け暮れの慰めにも見ばや、 | P134L8 |
| P171 | 「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」 | P132L3 |